

庭

太宰治

青空文庫

東京の家は爆弾でこわされ、甲府市の妻の実家に移転したが、この家が、こんどは焼夷弾しょういだんでまるやけになったので、私と妻と五歳の女兒と二歳の男児と四人が、津軽つがるの私の生れた家に行かざるを得なくなつた。津軽の生家では父も母も既になくなり、私より十以上も年上の長兄が家を守っている。そんなに、二度も罹災りさいする前に、もつと早く故郷へ行つておればよかつたのにと仰言おつしやるお方もあるかも知れないが、私は、どうも、二十代に於いて肉親たちのつらよごしの行為をさまざまして来たので、いまさらうずうず図ず々しく長兄の厄介やっかいになりに行けない状態であつたのである。しかし、二度も罹災して二人の幼児をかかえ、もうどこにも行く

ところが無くなったので、まあ、当ってくだけるといふ気持で、ヨロシクタノムという電報を発し、七月の末に甲府を立つた。そうして途中かなりの難儀なんぎをして、たつぷり四昼夜かかって、やつと津軽の生家に着いた。生家では皆、笑顔もっを以て迎えてくれた。私のお膳ぜんには、お酒もついた。

しかし、この本州の北端の町にも、艦載機かんさいきが飛んで来て、さかんに爆弾を落して行く。私は生家に着いた翌あくの日から、野原に避難小屋を作る手伝いなどした。

そうして、ほどなくあの、ラジオの御放送である。

長兄はその翌る日から、庭の草むしりをはじめた。私も手伝った。

「わかい頃には、」と兄は草をむしりながら、「庭に草のぼうぼうと生はえているのも趣おもむきがあるとも思つたものだが、としをとつて来ると、一本の草でも気になつていけない。」

それでは私なども、まだこれでも、若いのであろうか。草ぼうぼうの廃園は、きらいでない。

「しかし、これくらいの庭でも、」と兄は、ひとりごとのように低く言いつづける。「いつも綺麗きれいにして置こうと思えば、庭師を一日もかかさず入れていなければならぬ。それにまた、庭木の雪がこいが、たいへんだ。」

「やつかいなものですね。」と居い候そうろうの弟は、おつかなびつくり合あ槌いづちを打つ。

兄は真面目まじめに、

「昔は出来たのだが、いまは人手も無いし、何せ爆弾騒ぎで、庭師どころじゃなかった。この庭もこれで、出鱈目でたらめの庭ではないのだ。」

「そうでしょうね。」弟には、庭の趣味があまりない。何せ草ぼうぼうの廃園なんかを、美しいと思つて眺ながめる野蛮人だ。

兄はそれからこの庭の何流に属しているのか、その流儀はどこから起つて、そうしてどこに伝つて、それからどうして津軽の国にはいつて来たかを説明して聞かせて、自然に話は利休りきゆうの事に移つて行つた。

「どうして、お前たちは、利休の事を書かないのだろう。いい小

説が出来ると思うのだが。」

「はあ。」と私は、あいまいの返辞をする。居候の弟も、話が小説の事になると、いくらか専門家の気むずかしさを見せる。

「あれは、なかなかの人物だよ。」と兄は、かまわず話をつづける。「さすがの太閤たいこうも、いつも一本やられているのだ。柚子味ゆずみ噌その話くらいは知っているだろう。」

「はあ。」と弟は、いよいよあいまいな返辞をする。

「不勉強の先生だからな。」と兄は、私が何も知らないと見きわめをつけてしまったらしく、顔をしかめてそう言った。顔をしかめた時の兄の顔は、ぎよつとするほどこわい。兄は、私をひどく不勉強の、ちつとも本を読まない男だと思っっているらしく、そう

して、それが兄にとって何よりも不満な点のようであった。

これは、しくじったと居候はまごつき、

「しかし、私は、どうも利休をあまり、好きでないんです。」と
笑いながら言う。

「複雑な男だからな。」

「そうです。わからないところがあるんです。太閤を軽蔑している
ようではないながら、思い切つて太閤から離れる事も出来なかつた
というところに、何か、濁りがあるように思われるのです。」

「そりや、太閤に魅力があつたからさ。」といつのままにやらきげん機嫌
を直して、「人間として、どつちが上か、それはわからない。両
方が必死に闘つたのだ。何から何まで対たいしよ蹠的な存在だからな。」

一方は下賤げせんから身を起して、人品あがらず、それこそ猿面の瘦やせた小男で、学問も何も無くて、そのくせ豪放おこ絢爛けんらんたる建築美術を興おこして桃山時代の栄華を現出させた人だが、一方はかなり裕福の家から出て、かっぶくも堂々たる美丈夫で、学問も充分、そのひとが草の庵いおりのわびの世界で対抗したのだから面白いのだよ。」

「でも、やっぱり利休は秀吉の家来でしょう？ まあ、茶坊主でしよう？ 勝負はもう、ついているじゃありませんか。」私は、やはり笑いながら言う。

けれども兄は少しも笑わず、

「太閤と利休の關係は、そんなものじゃないよ。利休は、ほとんど諸侯をしのぐ實力を持っていたし、また、当時のまあインテリ

大名とでもいふべきものは、無学の太閤より風雅の利休を慕っていたのだ。だから太閤も、やきもきせざるを得なかつたのだ。」

男つてへんなものだ、と私は黙つて草をむしりながら考える。

大政治家の秀吉が、風流の点で利休に負けたつて、笑つてすませないものかしら。男というものは、そんなに、何もかも勝ちつくさなければ気がすまぬものかしら。また利休だつて、自分の奉公している主人に対して、何もそう一本まいらせなくともいいじゃないか。どうせ太閤などには、風流の虚無などわかりっこないのだから、飄ひょうぜん然と立ち去つて芭蕉ばしょうなどのように旅の生活でもしたら、どんなものだろう。それを、太閤から離れるでもなく、またその権力をまんざらきらいでもないらしく、いつも太閤の身

辺にいて、そうして、一本まいらせたり、まいったり、両方必死に闘っている図は、どうも私には不透明なもののように感ぜられる。太閤が、そんなに魅力のある人物だったら、いつそ利休が、太閤と生死を共にするくらいの初心うぶな愛情の表現でも見せてくれたらよさそうなものだとも思われる。

「人を感激させてくれるような美しい場面がありませんね。」私はまだ若いせいか、そんな場面の無い小説を書くのは、どうもおつくうなのである。

兄は笑った。相変らずあまい、とても思ったようである。

「それは無い。お前には、書けそうも無いな。おとなの世界を、もっと研究しなさい。なにせ、不勉強な先生だから。」

兄は、あきらめたように立ち上り、庭を眺める。私も立つて庭を眺める。

「綺麗になりましたね。」

「ああ。」

私は利休は、ごめんだ。兄の居候になっていながら、兄を一本まいらせようなんて事はしたくない。張り合うなんて、恥ずべき事だ。居候でなくったって、私はいままで兄と競争しようと思つた事はいちども無い。勝負はもう、生れた時から、ついているのだ。

兄は、このごろ、ひどく痩せた。病気なのである。それでも、代議士に出るとか、民選の知事になるとかの噂うわさがもつぱらである。

家の者たちは、兄のからだを心配している。

いろいろの客が来る。兄はいちいちその人たちを二階の応接間
 にあげて話して、疲れたとは言わない。きのうは、しんない新内の女師
 匠が来た。富士太夫の第一の門弟だという。二階のきんぶすま金襴の部
 屋で、その師匠が兄に新内を語って聞かせた。私もお附合いに、
 聞かせてもらう事になった。あけがらす明かさね鳥と累身売りの段を語った。
 私は聞いていて、ひざ膝がしびれてかなりの苦痛を味い、かぜをひい
 たような気持になったが、病身の兄は、一向に平気で、さらに所
 望し、のちのまさゆめ後正夢と蘭蝶を語ってもらい、それがすんでから、皆
 は応接間のほうに席を移し、その時に兄は、

「こんな時代ですから、いなか田舎に疎開なさって畑を作らなければな

らぬというのも、お気の毒な身の上ですが、しかし、芸事というものは、心掛けさえしつかりして居れば、一年や二年、さみせんと離れていても、決して芸が下るものではありません。あなたも、これからです。これからだと思えます。」

と、東京でも有名なその女師匠に、全くの素人しろうとでいながら、悪びれもせず堂々と言つてのけている。

「大きい！」と大向うから声がかかりそうな有様であつた。

兄がいま尊敬している文人は、日本では荷風かふうと潤一郎らしい。それから、支那しなのエッセイストたちの作品を愛読している。あすは、呉清源ごせいげんが、この家へ兄を訪ねてやって来るという。碁ごの話ではなく、いろいろ世相の事など、ゆっくり語り合う事になるら

しい。

兄は、けさは早く起きて、庭の草むしりをはじめているようだ。野蛮人の弟は、きのうの新内で、かぜをひいたらしく、離れの奥の間で火鉢ひばちをかかえて坐って、兄の草むしりの手伝いをしようかどうかとしようかと思ひ迷っている形である。呉清源という人も、案外、草ぼうぼうの廃園も悪くないと感じる組であるまいか、など自分に都合のいいような勝手な想像をめぐらしながら。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集8」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成1）年4月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：もりみつじゅんじ

2000年2月1日公開

2005年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

庭

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>